



# 国際病理アカデミー

## 日本支部

A NEWS BULLETIN 2001 Number 4

Published quarterly  
by the Japanese Division  
of the International  
Academy of Pathology

### OFFICERS

#### PRESIDENT

R.Y. Osamura, M.D. (03)  
*Tokai University*

#### PAST PRESIDENT

S. Ushigome, M.D. (03)  
*Jikei University*

#### PRESIDENT-ELECT

T. Morohoshi, M.D. (03)  
*Showa University*

#### SECRETARY-TREASURER

O. Matsubara, M.D. (03)  
*National Defense Medical College*

#### COUNCILLORS

H. Yamabe, M.D. (01)  
*Kyoto University*

Y. Kato, M.D. (01)  
*Cancer Institute*

S. Mori, M.D. (02)  
*University of Tokyo*

H. Hashimoto, M.D. (02)  
*University of Occupational and Environmental Health*

T. Manabe, M.D. (03)  
*Kawasaki Medical School*

M. Tsuneyoshi, M.D. (03)  
*Kyushu University*

#### COMMITTEE CHAIR

##### Education

N. Nemoto, M.D. (03)  
*Nihon University*

##### Finance

M. Shamoto, M.D. (01)  
*Fujita Health University*

##### Nomination

S. Ushigome, M.D. (03)  
*Jikei University*

### 第7回日韓IAP合同スライドカンファレンス報告

川崎医科大学附属病院病理部 三上芳喜



三上芳喜事務局長

当方は朝から冷え込みましたが、透き通るような秋晴れに恵まれ、早い方では8時過ぎ頃より会場に姿を現し、スライド登録、コーヒーを片手にロビーで歓談されるなどしておりました。午前9時過ぎより骨軟部腫瘍カンファレンスが始まり、合計8症例が提示されて熱い議論が交わされました。ランチョン・セミナーではダコ・ジャパンの橋詰薰氏が「免疫染色と標準化治療に直結する診断手技について」と題して講演を行い、昼食を挟んで、午後1時から合同カンファレンスが開始されました。開会にあたり、今回の会長である川崎医科大学、真鍋俊明教授、続いてIAP日本支部会長である東海大学、長村義之教授が挨拶をされた後、防衛医科大学、松原修教授が日本側参加者の紹介を行いました。その後、IAP韓国支部会長、Kyung He大学、Moon Ho Yang教授が韓国側を代表して挨拶をされ、Korea大学、Yang Seok Chae教授が韓国側参加者の紹介をされました。

このカンファレンスでは日本、韓国からそれぞれ6例、合計12例の症例が呈示されましたが、内容は一般的なスライドカンファレンスとは異なり、discussantが予め配布されたHE標本のみから、診断およびそれに至るまでのプロセスを鑑別診断を挙げながらコメントした後に、症例を提供した、いわゆる出題者が特殊染色、免疫組織化学、遺伝子検索などの結果を踏まえた診断の“種あかし”をする、というユニークな形態をとっています。従って、形態診断の醍醐味を楽しみながら、12に及ぶ選りすぐりの“challenging case”を楽しむことができました。出題は中枢神経系から呼吸器、消化器、婦人科領域、泌尿生殖器、造血器、骨・軟部組織、肝臓、腎臓など多岐にわたり、まさに日韓 diagnostic Pathologistsの競演の場、といった様子でした。前半の6例が終了してコーヒーブレイクをとった後、教育講演として徳島大学、佐野壽昭教授が、「内分泌腫瘍の病理」と題して、特に最近話題となっている神経内分泌癌neuroendocrine carcinomaの概念、臨床病理学的特徴、診断基準などを中心に話されました。カンファレンスは午後6時30分に終了する予定でしたが、後半の6例目が終了したのは、20分遅れの6時50分過ぎでした。閉会後、多くの先生方はそのまま会場で用意したバスにて、懇親会が開催される倉敷チボリ公園に向かいました。チボリ公園はデンマークにあるチボリ公園のコンセプトをベースにつくられ、1997年に開園したアミューズメント・パークで、夜にはその夜景が大変美しい



真鍋俊明会長

He大学、Moon Ho Yang教授が韓国側を代表して挨拶をされ、Korea大学、Yang Seok Chae教授が韓国側参加者の紹介をされました。このカンファレンスでは日本、韓国からそれぞれ6例、合計12例の症例が呈示されましたが、内容は一般的なスライドカンファレンスとは異なり、discussantが予め配布されたHE標本のみから、診断およびそれに至るまでのプロセスを鑑別診断を挙げながらコメントした後に、症例を提供した、いわゆる出題者が特殊染色、免疫組織化学、遺伝子検索などの結果を踏まえた診断の“種あかし”をする、というユニークな形態をとっています。従って、形態診断の醍醐味を楽しみながら、12に及ぶ選りすぐりの“challenging case”を楽しむことができました。出題は中枢神経系から呼吸器、消化器、婦人科領域、泌尿生殖器、造血器、骨・軟部組織、肝臓、腎臓など多岐にわたり、まさに日韓 diagnostic Pathologistsの競演の場、といった様子でした。前半の6例が終了してコーヒーブレイクをとった後、教育講演として徳島大学、佐野壽昭教授が、「内分泌腫瘍の病理」と題して、特に最近話題となっている神経内分泌癌neuroendocrine carcinomaの概念、臨床病理学的特徴、診断基準などを中心に話されました。カンファレンスは午後6時30分に終了する予定でしたが、後半の6例目が終了したのは、20分遅れの6時50分過ぎでした。閉会後、多くの先生方はそのまま会場で用意したバスにて、懇親会が開催される倉敷チボリ公園に向かいました。チボリ公園はデンマークにあるチボリ公園のコンセプトをベースにつくられ、1997年に開園したアミューズメント・パークで、夜にはその夜景が大変美しい





## (2) スライドセミナー：根本教育委員長

<第1時間目> 13:00-14:40

- A. 骨の病理：野島孝之（金沢医大）
- B. 内分泌腫瘍：長村義之（東海大病理）
- C. 乳腺の病理と細胞診：土屋眞一（長野県がん検・救セ）
- D. 腎（腎生検を含む）の病理：田口 尚（長崎大学病理）

<第2時間目> 14:50-16:30

- A. 精巣腫瘍：森永正二郎（自治医大病理）
- B. 卵巣腫瘍：手島伸一（同愛記念病院検査科）
- C. 唾液腺腫瘍：長尾孝一（元帝京大市原病院）
- D. 肺生検（TBLB）の病理：松原 修（防衛医大病理）

## #4. 今後のInternational Congress of IAP

2002年Amsterdam、2004年Brisbane、2006年Montreal、(2008年Greece?)立候補予定

## #5. アジアIAP学会

1) The 3rd Asia-Pacific IAP Congress、2003年1月 Bangkok Thailand

2) 長村会長がThe 7th Asia-Pacific Association of Societies of Pathologists(APASP), Singapore (November 18-22, 2001)

3) The 8th Asia-Pacific Association of Societies of Pathologistsが2003年にバリ島で

## #6. 理事選挙結果

投票依頼：IAP日本支部2002-2004年任期の指名理事候補者資料（氏名、卒業、所属先、アカデミーへの貢献などを記載、順番はABC順）を4名の候補者：加藤 洋先生（癌研病理部長）、向井 清先生（東京医科大学病理学第1講座教授）、佐野寿昭先生（徳島大学病理学第1講座教授）と笛野公伸先生（東北大学大学院医学研究科病理診断学教授）を送り、2000年11月に第2段投票を行った。11月20日に集計すると、投票率は、返信191通／発送604通（投票率31.6%）（昨年の投票率は40.5%）で、内、無効葉書3枚、1人のみ無効葉書1枚、1人のみ投票葉書2枚、白票葉書1枚。結果は上位2人が加藤 洋先生、向井 清先生であった。

## #7. 理事・役員人事

1999-2001年理事 山辺博彦先生、ご苦労様でした。

1999-2001年理事 加藤 洋先生は引き続き、2002-2004年理事を、向井 清先生（東京医科大学病理学第1講座教授）には2002-2004年理事をよろしくお願ひします。

2000-2001年会計監事 社本幹博先生、ご苦労様でした。

2002年会計監事を山辺博彦先生にお願いします。

それで、2002年度の理事・役員人事体制は以下の如くなります。

### 平成14年度 IAP日本支部役員名簿

会長 長村義之（東海大学総合診療学系  
病理診断学）

前会長 牛込新一郎（京浜予防医学研究所診断病  
理センター／東京慈恵会医科大学）

次期会長 諸星利男（昭和大学医学部病理学第1）  
常任幹事 松原 修（防衛医科大学校病理学第2）

理事 森 茂郎（東大医科学研副所長・  
人癌病因遺伝子分野）

橋本 洋（産業医科大学病理学第1）

真鍋俊明（川崎医科大学病理学）

恒吉正澄（九州大学医学部病理学第2）

加藤 洋（癌研究会癌研究所病理部）

向井 清（東京医科大学病理学第1講座）

教育担当 根本則道（日本大学医学部病理学）

会計監事 山辺博彦（日赤和歌山医療C病理部）

### 平成14年度 IAP日本支部理事指名委員会

委員長 牛込新一郎  
副委員長 鈴木 実（桐生短期大学看護学科）

委員 丸山孝士  
社本幹博（藤田保健衛生大学総合医科学  
研究所病態細胞学）

山邊博彦

## #8. 2001年決算（同封）

## #9. 2002年事業計画と2002年収支予算案（同封）

### 2002年事業計画

1. 支部総会 岡山大学赤木教授のお世話の下で、

11月16日（土曜日）

2. 教育セミナー開催 同上

教育シンポジウムとスライドセミナー

3. SURGICAL PATHOLOGY UPDATE 2002開催

湘南国際村、6月14-16日（金-土曜日）

- 4. 支部結成40周年記念事業
- 5. A News Bulletin発行、4回
- 6. 日韓を始め国際IAP支部との友好関係事業
- 7. IAP本部との緊密な連係
- 8. Lab Invest, Mod Patholの安価購入の仲介
- 9. WHO分類の安価購入の仲介

## #10. 種々のAward(賞)新設

### 1) IAP日本支部・功労賞

受賞資格：IAP日本支部会員

受賞対象：長年のIAP日本支部の発展への貢献

USCAPの The F K Mostofi Distinguished Service Award に相当、選考は理事会による

### 2) IAP日本支部・病理診断教育賞

受賞資格：IAP日本支部会員

受賞対象：長年の病理診断学の教育への貢献

USCAPの The Distinguished Pathologist Award に相当、選考は理事会による

### 3) IAP日本支部・病理診断学術奨励賞

受賞資格：若手（40才未満）の病理医

受賞対象：前年に公表された診断病理分野における優れた英文業績（1編）、USCAPの The Benjamin Castleman Award に相当、選考は特別委員会による、最大3名、副賞10万円

### 4) IAP日本支部・特別功労賞

受賞資格：IAP日本支部会員以外のIAP会員

受賞対象：長年のIAP日本支部の発展への貢献

選考は理事会による

### 5) IAP日本支部発足40周年記念特別賞

受賞資格：元IAP日本支部会員役員

受賞対象：発足初期のIAP日本支部の発展に貢献

選考は理事会による

以上の5種類の賞を新設する。3)以外は賞状と副賞（現金以外）で、3)は最大3名、副賞10万円とし、細かい点を引き続き、山辺委員会（山辺委員長、加藤理事、真鍋理事、事務局：松原）にて詰める。

## #11. 理事選出に関する細則の改定

(1) 理事選挙第1段投票の廃止すること、(2) 理事指名委員会で理事立候補も受付けること、(3) 他薦も受付けること、(4) 現在理事指名委員会が4人を指名して理事選挙が行われるが、指名された4人以外の候補者へ（1つ空白のマスを作り）、投票してもよいこととする。以上の4点を取り入れて、理事選挙の細則を改定する。

## #12. 会員名簿の作成の周期

慣習として2年ごとに発行していたが、財政的に負担が大きいので、4-5年に1回の発行とすること、入会、退会、住所変更のものは年に1回くらい修正版を会報に挟むこと。

\* \* \* \* \*

## #13. IAP日本支部結成40周年記念事業について

1) 趣旨：IAP本部の結成はMcGill University (Montreal, Canada)のDr. Maud E. Abbottの提唱から始まるとされ、IAPのロゴマークにも顕微鏡、International Association of Medical Museum (IAMM)と1906年が描かれています。

一方、IAP日本支部の結成のいきさつは、「国際病理アカデミー日本支部25周年記念号（1986年発行）」の中の故太田邦夫元会長による「IAP日本支部の歴史・背景ならびに展望」に記述されている。それによると、「1958年11月、IAPの当時の会長であったDr. Binfordが来朝し、日本病理学会総務幹事の吉田富三教授に会ってIAP日本支部を設立するよう要望した。吉田教授は在京の病理学者14名（吉田、馬場、江頭\*、石川、西山\*、影山\*、岡林、太田、斎藤、竹内、高木、滝沢、所、内海……\*印IAP会員）と茗渓会館においてDr. Binfordとの会談の機会を設け、1959年江頭博士が訪米の際にはDr. Binford及びDr. Mostofi (Secretary / Treasurer)に面接して諸条件を調査せめたのち、国際病理学態勢の一環として、支部設立の必要を認め、これを日本病理学会理事会に報告して諒解を得た上で、日本病理学会評議員名から40名の参加を得てIAP日本支部が設立された(1961)。IAPは1961年Chicagoにおける理事会で日本支部の加入を認めた。」とあります。それで、今年2001年はIAP支部結成40周年となります。

この節目の年に結成40周年を祝い、記念事業を行うことは、IAP支部の発展に貢献のあった諸先輩のことを思いやり、今後の支部の発展、宣伝にもつながると考え、本事業を提案します。

2) 事業の概要:IAP支部結成40周年記念Partyの開催とIAP支部の発展に貢献のあった諸先輩の表彰の2つが主要な事業であります。

3) 表彰の候補者:歴代の会長をされた故吉田富三(1961-1972)、故太田邦夫(1973-1978)、江頭靖之(1979-1982)、故西山保一(1983-1985)、石川栄世(1986-1988)、福田芳郎(1989-1991)、遠城寺宗知(1992-1994)、鈴木実(1995-1997)の先生諸氏中で存命中の先生方(underline)、5名とInternational Congress of IAP, Nagoyaの会長をされた町並陸生先生の1名、合計6名の先輩方について、表彰する。つまり、IAP日本支部への貢献を整理すると、

江頭靖之先生(1979-1982会長、1961-1978常任幹事)

石川栄世先生(1986-1988会長、1961-1975理事)

福田芳郎先生(1992-1994会計監事、1989-1991会長、1983-1988常任幹事、1979-1982教育委員長、1977-1979と1982理事)

遠城寺宗知先生(1999-2000理事指名委員会副委員長、1992-1994会長、1978-1980と1985-1987理事)

鈴木実先生(2001理事指名委員会副委員長、1999-2000理事指名委員会委員長、1995-1997会長、1989-1991理事)

町並陸生先生(International Congress of IAP, Nagoyaの会長、1990-1992と1995-1997理事、1999理事指名委員会委員)

となります。以上の様に、IAP日本支部の発足、基礎がためまた発展への貢献が多大であると感謝の気持ちから、「IAP日本支部発足40周年記念特別賞」を表彰するということになります。

#### 4) 予算規模:

40周年記念Party費用	500,000円
表彰関係	200,000円
招待者旅費	100,000円
本部予算合計	800,000円

なお、現理事・役員、理事指名委員、近郊在住元理事・役員、一般会員に声をかけ、会費5,000円で協力をお願いする。この会費はParty費用にあてる。賛助会員の5社はご招待する。

5) 日程、場所:2002年2月か3月(旅費などの節約のため、第1回理事会周辺はどうか)。今のところ2002年2月18日(月曜日)の夕方、6-8時を考えている。

#### 6) IAP支部結成40周年記念事業実行委員会の結成:

実行委員長:	牛込前会長
Partyの運営・司会:	長村会長
表彰担当:	諸星次期会長
事務局:	松原常任幹事



### IAP日本支部結成40周年記念Party

日程:2002年2月18日(月曜日)6時-7時30分

場所:東海大学校友会館「富士の間」

霞が関ビル33F、千代田区霞が関3-2-5、電話3581-0121

表彰者:江頭靖之先生、石川栄世先生、福田芳郎先生、遠城寺宗知先生、鈴木実先生、町並陸生先生

会費:5,000円

多数のご参加を望みますが、料理の用意の都合がありますので、参加を希望する方は2月6日(水)までに事務局(松原・佐々木042-995-1507)へご連絡下さい。

wwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwww

### 平成13年度教育シンポジウム開催

### “Gastrointestinal stromal tumor (GIST)”

#### をめぐる諸問題

橋本洋

以前は、胃腸管に発生する非上皮性腫瘍の大部分は平滑筋腫ないし平滑筋肉腫と考えられていたが、1983年にMazur and Clarkが胃平滑筋腫と診断されていた腫瘍のほとんどは免疫組織化学的および電子顕微鏡的に平滑筋細胞への分化を証明できず、それらをgastric stromal tumorと命名して以来、小腸



および大腸においても同様の事実が認識されるようになり、gastrointestinal stromal tumor(GIST)という診断名が広く用いられるようになってきた。

しかしながら、眞の平滑筋細胞性腫瘍やgastrointestinal autonomic nerve tumor(GANT)などの胃腸管に発生する他の非上皮性腫瘍との異同を含めて、GISTの概念は必ずしも確立したとはいえず、本シンポジウムではまず、柳澤昭夫氏、朴成進氏、斎木由利子氏、加藤洋氏(癌研究会癌研究所病理部)がGISTをどのように捉えたよいかを解説した。次に岩下明徳氏(福岡大学筑紫病院病理部)が日常の病理診断において最も難渋するGISTの良悪性の区別および悪性度の判定における予後因子の解析を含めて、GISTの臨床病理像を発表した。

この数年で、胃腸管以外に発生したGISTと同様の組織像を呈する腫瘍が大網、腸間膜、後腹膜などに報告されてきたが、櫻井信司氏(自治医科大学病理学教室)は大網原発GIST様腫瘍とその前駆細胞に関する研究成果を発表した。

GISTの組織起源は必ずしもすべて解明されたとはいえないが、現在ではCajal間質細胞(interstitial cells of Cajal)由來説が一番有力である。鳥橋茂子氏(名古屋大学大学院医学研究科機能形態学講座分子細胞学分野)は解剖学の立場から、Cajal間質細胞の構造と機能を解説した。

GISTにおけるc-kit遺伝子産物(KITレセプター)の発現はCD34とともに日常の病理診断に応用されているが、1998年にc-kit遺伝子とGISTとの関係を最初に報告した廣田誠一氏(大阪大学附属病院病理部)がc-kit遺伝子を説明し、GISTにおけるc-kit遺伝子異常について解説した。総合討論ではGISTの定義、予後の判定、組織発生、Cajal間質細胞の分布などについて活発に討議され、有意義なシンポジウムとなった。

wwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwww

### 平成13年度スライドセミナー開催

教育委員長 根本則道

平成13年度のスライドセミナーは、去る11月29日(木)信濃町の東医健保会館で行われた。本年度は既設の卵巣腫瘍(手島伸一先生)、唾液腺腫瘍(長尾孝一先生)、内分泌腫瘍(長村義之先生)、肺生検の病理(松原修先生)、腎糸球体病変の病理(田口尚先生)、乳腺の穿刺吸引細胞

診の見方（土屋真一先生）に加え、新規コースとして骨の病理（野島孝之先生）、精巣腫瘍（森永正二郎先生）の計8コースが用意され、延べ535名が受講し盛会裡に終了した。ポストアンケートでは、セミナー内容についての意見は概ね好評であった。しかし、開催時期や場所（都市）については受講者が参加し易いことを最優先にして欲しいとの希望が多くあった。例年、スライドセミナーの開催は週末であり、大学などの施設を利用して頂くことが多かったが、本年度は木曜日であり、会場の設定に苦慮した。次年度は新たに4コースが加わる予定であり、会員の生涯学習に有益な興味深いセミナー内容を企画している。

## IAPアルゼンチン支部を訪ねて IAP本部次期会長 牛込新一郎

ブエノスアイレスで開催予定の外科病理セミナー（テーマは乳腺、消化管、皮膚、骨・軟部の病理）に講師として参加の筈が転じてイグアスへの旅となってしまった顛末記である。セミナーは9月20日～22日に予定されていたが、あの想像を越えたやり口のテロが9月11日に発生したのである。16日に出発予定で、行くべきか否か、大変気を揉んだが、出発前日の昼に航空券が届いたので、翌日出発してしまった。往路はニューヨーク経由、復路はロス経由であり、空港でのセキュリティチェックも時間を要した。座席は往路、復路ともに空席が目立っていた。

アルゼンチン支部の会員数は約300名であるが、南米ではブラジル（約450名）とともに最も活動的な支部である。ことさら、この数年間の活動は積極的である。IAPのVice-President（南米）であるEduardo Santini Araujo教授のリーダーシップのお蔭であろう。骨腫瘍病理で著名なF. Schajowicz先生の愛弟子でもある。ブエノスアイレス空港では彼が同僚と共に出迎えてくれた。なんと入国官吏が肠道から特別扱いで通してくれたのには驚いた。病理医としての力ではなく、彼個人の力であろう。ホテルに向かう車の中で米国からの講師が来られなくなったので、残念ながらセミナーは中止、延期となり、主な新聞にそのむねの広告を出したという。米国における同時多発テロの影響をもろに受けけて開催不可能となったのである。

彼は終始日本的な気遣いをもっててなしてくれた。日本に大変好意的で、当地に住む日本人の真面目さを大変たたえていた。

翌日から一泊でイグアスの滝への旅立ちと相成った。冬季なのに暖かい好天に恵まれ、片道1時間40分の飛行時間で、エルト・イグアス空港に降り立った。タクシーで滝の脇にあるホテルに向かう途中道路には驚く程乱舞する蝶々が大歓迎してくれた。国立公園として羨ましいほど大自然が保護され、大部分がジャングルとして残されている。一方、見物人にとって行き届いた遊歩道が完備されているのには感心した。アルゼンチン側から壮大な滝景色を楽しみ、滝つぼに向かう船旅でびしょ濡れとなった。都会を離れた寛ぎの雰囲気でタ

食とお喋りを楽しんだ。IAPの将来について意見を述べ合い、彼は私のPresidency（アムステルダムの国際会議以降）を支持すると約束してくれた。

ブエノスアイレスに戻ってから、Natalio Guman教授（第18回国際会議の会長、IAPのゴールドメダリスト）とも会うことができ、小生の帰路の航空券についても、奔走してくれた。NatalioとEduardoの良いコンビがアルゼンチン支部を支えていくものと思った次第である。最後の日には有名な肉料理専門店「Nazarenas」というレストランでL.Olvi医師も加わって昼食を用意してくれた（写真。左からOlvi、牛込、Araujo、Guman）。ここは忘れもしないXVIII International Congress（1990）の時（日本開催の誘致行動を初めて起こした時）、日本支部が香港に破れ、故西山IAP副会長、福田日本支部会長、常任幹事の私とで、バックアップしていただいたJ.P. Strong教授らを招待したレストランであった。Unni教授（Mayo Clinic）が骨病理の仲間を夕食に招いてくれたのも此處であった。Natalioは猛スピードで空港まで連れてってくれて、航空券の変更に実にねばっこく航空会社と掛け合ってくれた。

おわりに、今回は講演の目的は果たされなかったが、南米において最も活動的なIAP支部の役員と親しく交流を深め、個人的に意見交換ができたことは筆者のIAPにおける今後の活動に甚だ有意義であったと思う。NatalioとEduardoとは近くシカゴで開催されるUS-CAP MeetingでのIAP理事会での再会を約束してブエノスアイレス空港を離れた。

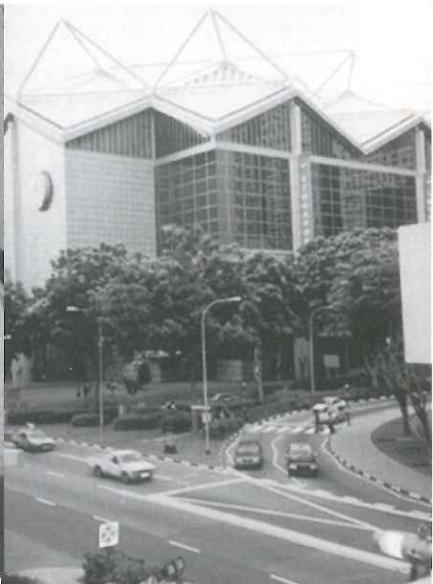
## Surgical Pathology Update 2002

来年のテーマは、「子宮体癌と肺病理」で、FacultyはSilverberg教授とMayo ClinicのJeffrey L. Myers先生を予定しています。日程は平成14年6月14-16日（金土日曜日）で、場所は同じ湘南国際村センターです。多くの方のご参加を望みます。スケジュールを組んでおいて下さい。

#  
**7th Congress, Asian Pacific Association of Societies of Pathologists (Singapore)に出席して 長村義之**

常夏そしてMarlion（上半身はライオン、下半身は人魚）の国シンガポールで、11月18日より23日までシンガポールの国際会議場にて第7回APASPが開催された。日本から、日本医大的前田昭太郎先生、熊木伸枝先生（東海大）など数名の方も出席されていた。私は、Plenaryとシンポジストとしての講演を行った。出席者は、約200名程シンガポールはもとよりタイ、マレーシア、インドネシア、オーストラリア、中国、インドなど参加国は多岐にわたっていた。内容はAnatomical PathologyとClinical Pathologyにより構成されており出席者の活発な討論から“アジアの熱気”が感じられた。次回は、2003年にインドネシアのバリ島で開催予定。

学会会場の国際会議場



## 展示会場 Booth



Congress dinner(Dr.Anthony Leong夫妻 (オーストラリア) :左、Dr.Suat - Chen Peh (マレーシア) :右)



## \*\*\*\*\* 第3回IAP日本支部理事会

日時：平成13年11月27日（火曜日）12：30－13：30

場所：九段会館、4階、あおいの間（電話03-3261-5521）

出席者：長村、牛込、諸星、山邊、加藤、恒吉、森、根本、社本、松原、佐々木洋子（事務局）欠席者：真鍋、橋本  
議題について

### 報告事項：

- 1.庶務報告のこと
- 2.The 7th Japanese-Korean Joint Slide Conference
- 3.2001年秋の教育セミナーについて
- 4.牛込前会長が南米へ
- 5.今後のInternational Congress of IAP
- 6.The 3rd Asia-Pacific IAP Congress
- 7.その他USCAP Chicagoでの報告

### 審議事項：

- 1.理事選挙結果について
- 2.2001年決算と2002年予算
- 3.AとB会計の統合について

4.Award(賞)新設の検討：（委員長：山辺理事、委員：加藤理事、真鍋理事）

1) 功労賞、2) 病理診断教育賞、3) 病理診断学術奨励賞、4) 特別功労賞、5) 日本支部発足40周年記念特別賞、以上の5種類の賞が提案され、基本的に了承された。細かい点を引き続き、山辺委員会に詰めて頂くこととなった。

5.Surgical Pathology Update 2002の進捗状況：2002年6月14-16日、例年の湘南国際村で開催予定。テーマは子宮内膜と肺（腫瘍と非腫瘍）の外科病理。講師はSG.Silverberg教授（Maryland大学）、J.Myers（Mayo Clinic）で、日本側は清川（慈恵医大）と松原（防衛医大）。

6.理事指名委員会での議論と理事選挙第1段投票について：牛込理事指名委員会委員長から、理事選挙第1段投票の投票率が大変に悪く、多くても10票台である現状からは、第1段投票を止めて、理事指名委員会がいろいろな点を考慮して4名を指名してもよいのではないかと理事指名委員会で話されたことが報告された。（1）理事に立候補も受付け、理事指名委員会へ伝達すること。（2）自薦他薦も受付けること。

（3）現在理事指名委員会が4人を指名して理事選挙が行われるが、指名された4人以外の候補者へ（1つ空白のマスを作り）、投票してもよいことにしてはどうか。以上の意見がで、（1）－（3）まで、取り入れて、理事選挙の細則を改定することになった。

7.会員名簿の作成について：松原から、慣習として2年ごとに発行していたが、財政的に負担が大きいので、もう少し間隔をあけてはどうか？と提案があり、審議の結果、4-5年に1回の発行とすること、入会、退会、住所変更のものは年に1回くらい修正版を会報に挟むことになった。

8.次回の理事会日程：関連して、岡山大の赤木先生が世話役でIAP教育セミナーもお世話になるのでシンポやスライドセミナーの新規コースを検討する理事会に出席をお願いしてはどうか？が審議され、理事会に出席をお願いすることになった。日程については、2002年2月19日（火曜日）前後と話された。

次回の理事会は支部結成40周年記念Partyの都合上、2002年2月18日（月曜日）4時30分－5時30分に、東海大学校友会館「霞の間」（霞が関ビル33F、千代田区霞が関3-2-5、電話3581-0121）で行います

### 9.IAP日本支部結成40周年記念事業について

wwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwww

### 事務局よりお願い

#### 1) 年度会費納入のお願い-----

同封の郵便局での振り込み用紙で年会費4,000円ほどお振り込みください。

#### 2) 購入希望雑誌の申し込みをお忘れなく-----

Laboratory Investigation and/or Modern Pathologyの雑誌の購入希望用紙も送り返して下さい。Laboratory Investigationの市場価格（年間）：43,500円に対してIAP会員（年間）：12,000円、Modern Pathologyの市場価格（年間）：31,200円に対してIAP会員（年間）：12,000円です。英語の氏名、住所など明瞭に書き込んでファックスにて送り返して下さい。不明瞭ですとアメリカからの雑誌の送付が危うくなります。購入代金は現金書留にて事務局まで送って下さい。

雑誌購入の締め切りは平成13年1月21日まで、代金の送付は1月末締め切りでお願いします。

#### 1,000円値上げのお願い！

Laboratory Investigation : 12,000円

Modern Pathology : 12,000円

US\$US\$ 最近の円安（1ドル=128円）からご理解を！

例年、申し込みを忘れて。雑誌が届かないと苦情を事務局に言われるのですが、年初めでないと私どもも何ともしてあげられません。途中からでは申し込めないです。また、会計の表を見ていただけになると分かるように、ドル換算のレートで、学会が損も得もしないように細心の注意を払っていますが、最近の円安（1ドル=128円）には、去年の11,000円では対応できず、値上げして12,000円でお願いします。上前をはねていないことをよくよくご理解して下さい。

#### 3) 2001年度の教育シンポジウムとスライドセミナーのテーマについてのアンケートにご協力を

同封のアンケート用紙をファックスにて送り返して下さい。

#### 4) 新入会員の募集について

IAP日本支部では、まだ会員となられていない方々の入会をおすすめいたします。必要なとき会員申込書を事務局までご請求下さい。

入会資格：病理学の経験年数5年以上で、現在病理を専攻されている方。

入会方法：入会申込書をご記入の上、IAP事務局までお送り下さい。その際、会員2名の推薦が必要となります。お近くに適当な方がいらっしゃらない場合は、事務局にご相談下さい、我々が推薦者となることも可能です。入会が承認され次第、振込用紙を送付いたしますので、その後入会金1,000円、年会費4,000円、合計5,000円ほどお振り込みください。

**あとがき**：2001年度第4号をお届けします。同時に（1）2001年度決算、（2）2002年度予算表、（3）2002年度会費納入の振込用紙、（4）雑誌購入希望用紙、（5）教育シンポジウムと、（6）スライドセミナーのテーマのアンケートを同封します。このブレティンは年末に作成、皆さんのお手元には新年早々に届くことと思いますが、よいお正月をお迎え下さい。会員の皆様にとって輝ける素晴らしい2002年でありますよう。常任幹事：松原修／事務局：佐々木洋子

〒359-8513 所沢市並木3-2 防衛医科大学病理学第2  
P: 042-995-1507 / F: 042-996-5193  
E-mail:matubara@cc.ndmc.ac.jp